

平成 21 年 5 月 14 日（木）

全国赤十字大会挨拶

日本赤十字社 社長 近衛 忠輝

本日、日本赤十字社名誉総裁皇后陛下、名誉副総裁常陸宮妃殿下、同じく高円宮妃殿下をお迎えし、日頃から赤十字を支えてくださっている多くの皆様とともに全国赤十字大会を開催できますことは大きな喜びであります。

今から 150 年前の 6 月、赤十字の創設者アンリー・デュナンは、一介の旅人として北イタリアを訪れ、ソルフェリーノでイタリアの統一をめぐる世紀の大戦に遭遇します。両軍合わせて 26 万の大軍が、11 時間にわたって激突を繰り返す中で、彼が目当たりしたのは、凄絶な殺し合いと、救いもなく戦場に打ち棄てられた無数の傷ついた兵士たちの無残な姿でした。心を揺さぶられたデュナンはそこで、何の覚悟も、備えも、医療の心得もないまま、近隣の住民の協力を得て救護の活動に一途に邁進します。「戦場にも慈悲を」、そのためにせめて、日頃から訓練された救護の組織があったなら。彼はその悲痛な叫びを本に著し、各国の指導者に訴えます。その甲斐あって、4 年後には赤十字が誕生し、各国に相次いで救護の組織が生まれます。しかし「敵味方の区別なく」負傷者を救護するとなれば、その活動は中立でなければなりません。そして、そのことが広く知られ、また法によって国内でも国際的にも保証されていなければなりません。ソルフェリーノの戦いに遅れること 18 年、1877 年の西南戦争のとき、日本赤十字社の前身である博愛社が設立を政府に願い出た時、「賊軍をたすけるとはもつての他」と、一度は却下されています。そのことを見ても、デュナンの着想がいかに時代に先がけたものであったかがわかります。そして

博愛社は設立されてから 9 年後に、わが国が赤十字条約に加入したのを機に赤十字社となり、各国の社と足並みを揃えることになりました。

このように、赤十字は戦争の犠牲者の救護を目的に生まれました。そして、時代とともに救護の対象を軍人のみならず、一般市民にも広げて、今日に至っています。条約もそれに合わせて、彼らの生命や健康を守るのみならず、人間としての尊厳をも守るよう発展して、今日では国際人道法と呼ばれるようになりました。

一方で、平和な時代の活動も、各国それぞれに時とともに充実してゆきました。戦争に備えて設けられた病院や、そこで養成された人材は、災害や難民や疫病等の救援活動にも従事するようになり、日常的には地域の住民や生活困窮者の医療を担いました。そこから様々な福祉の活動も派生してゆきます。しかし、1917年のロシア革命に始まる社会主義の広まりは、多くの国で医療や福祉を国家の手に委ねることになりました。その上、第一次大戦後に設立された国際連盟は、戦争は永久になくなるとの束の間の期待を抱かせます。そうなれば、各国の赤十字社は新たな分野に活路を求めざるを得なくなります。ところが第二次大戦の勃発はその期待を裏切ったばかりか、一般市民にも未曾有の被害をもたらします。そして、赤十字は再び戦場での活躍を強いられます。大戦中には輸血治療が広まり、献血者の募集に力を発揮した赤十字には戦後大きな期待が寄せられることになります。

各国に赤十字社を設立し、その発展を促し、平時の活動を調整する機関としては、1919年に、現在の国際赤十字・赤新月社連盟の前身である赤十字社連盟

が創設されました。日本赤十字社は創設 5 社の一つとして、その準備の段階から深く関わっております。今年はその 90 周年に当たり、先週それを記念する行事が当時本部の置かれたパリであり、私も出席してまいりました。その 7 年前の 1912 年には、昭憲皇太后の思し召しによって、各国の赤十字社の平時の活動を推進するための国際的な基金が設立されており、今日でも途上国の赤十字の活動の支援に立派に役立っております。連盟の創設に先駆けて、それと目的を同じくする基金を作られた昭憲皇太后をはじめ、連盟創設への道を開かれた先人達の先見性を、私たちは大いに誇りとすべきだと考えます。

さて 20 年前の 1989 年 11 月、ベルリンの壁に象徴された東西の冷戦が終わりを告げ、世界は一斉にグローバル化の道を歩み出します。国境の壁は低くなり、人、資金、物、情報がおびただしく行き交うこととなります。しかし、それと足並みをそろえた、国境を越えたテロや犯罪の増加、人口移動、感染症の蔓延、食糧の偏在、資源の争奪、気候変動による災害の多発等は、新たな人道的な課題を国際社会に課すことになりました。今や一国だけでの、また一つの組織だけでの対応は不可能であり、世界 186 ヶ国に広がるネットワークを持つ赤十字も、それぞれの国で、またグローバルに、その中で果たすべき役割を真剣に模索しているところであります。

日本赤十字社は今日、先人達の努力によって、世界に誇る多彩で、かつ大規模な事業を展開しております。法律や制度によってしっかりと守られ、多くの国民の皆さまのご協力の下に成り立っているこれらの事業を引き継いで行くことは我々に課せられた大きな責任であります。しかし、わが国が、また国際社会がこれから直面するであろう試練の中には、赤十字が関心を寄せるべきもの

も多く含まれています。赤十字に、はたして何ができるのか。150年前ソルフェリーノの戦場でデュナンを襲ったのは、傷つき苦しむ多くの人々を救いたいという熱い思いと、それができない故の無力感とやるせなさでした。それが彼をして、赤十字の創設を思い立たせました。

赤十字を生んだのは、まさしくデュナンであり、赤十字がデュナンを生んだわけではありません。ここに今、デュナンが立っていたならば、何を思い、何をするだろうか。一人ひとりがデュナンになったつもりで、そのことを考えるのがこの年を記念する意味であります。

そしてこの大会を、過去の栄光と先人の偉業を偲ぶ通過儀礼で終わらせないために、アフリカでの献身的な医療活動で広く知られるシュヴァイツァー博士の言葉を引用して挨拶を締めくくらせていただきます。

「赤十字は、今では大変大きく、そして力強い存在となっています。創設者であるアンリー・デュナンも、これほどまでに発展するとは想像もしなかったでしょう。しかし、赤十字はそれだけではなく、もっと大切な存在です。それは、この戦後の悲惨な世界において、赤十字は一つの真理のために戦っていることです。それは何かというと、私たち誰もが、生まれながらにして持っている深い思いやりの心と人に尽くす心で、気づき、考え、行動するように願っていること、そして人々の連帯からなる国家も同じように行動しなければならないということです。赤十字は、この世界をより良いものに変えられるという希望を与えてくれています。私たちは、この世の暗闇に光を灯してくれた一人の男、アンリー・デュナンに、深い感謝を捧げます。今、この光を守り、燃やし

続けることができるかどうかは私たち次第なのです。」

ありがとうございました。